

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、定時制高校における外国人生徒に対して、どのような学習支援のあり方が有効かを検討することを目的としたものである。定時制高校を中心に外国人生徒が急増し、日本語支援の制度（「取り出し指導」という個別の指導）は作られているものの、教育の成果はもとより、その教育実態すら十分に把握できていない。本論文は、これまで調査研究がほとんどなされていなかった定時制高校の学習支援、とりわけ「取り出し指導」に焦点化し、その特徴と問題点を解明するとともに、今後の学習支援の在り方を詳細な事例研究を通して明らかにしたものである。これまでの研究では外国人生徒が学習支援のニーズを把握することの重要性は指摘されてきたが、本論文の独自性は、外国人生徒自身が学習支援について自分のニーズを必ずしも明確にできないことから、そのニーズを支援者が引き出す必要があることを明らかにした点、さらに、生徒は認識していないが、教員が生徒のために必要と判断する学習ニーズがあり、教育実践ではその両者の摺り合わせが重要なことを明らかにした点にある。

また、これまでの研究は、日本語指導について、その内容や方法、さらには教科学習と日本語指導を結びつけた統合教育の必要性を指摘するにとどまっていた。本論文では、日本語指導の構造的な問題を明らかにし、その問題を克服するための支援を実証的に明らかにしており、学術上高く評価できる。また、外国人生徒への有効な支援策の検討を通して定時制高校における日本語指導の新しい在り方について提言した点は、今後の教育実践に貢献するものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

序章において本研究の意義と目的が説明され、1章で先行研究を整理し、そこから本研究の課題を明らかにしている。2章では、高校段階の外国人生徒教育や外国人生徒の受け入れ実態を統計資料や学校の文書資料などを通して明らかにしている。3章では、観察とインタビューを中心とした質的調査法をとっている。参与観察やインタビューによって実態を解明しながら仮説を生成するという方法を採用しているが、これも研究上の特徴から妥当な方法といえる。また、4章では、「取り出し指導」という制度の実態把握から、有効な支援のあり方を外国人生徒の変容と支援との相互作用を動的に把握するために質的調査を行っており、これも妥当といえる。特に、4章は単なる事例調査をこえて、現在の定時制高校の外国人生徒が置かれている状況を多面的に把握し、具体の支援と生徒の変容の相互作用を的確にとらえており、実証研究として優れている。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文の調査は、都立高校を事例に数年間にわたって行ったフィールドワークであり、参与観察と半構造化インタビューにもとづく質的調査が主である。特に3章では、質問紙調査とインタビュー調査をもとに、「講師依存」「文脈依存」という特徴を描きだしており注目される。また、専任教員、日本語指導の非常勤講師、生徒という三者から得た質問紙調査と質的調査の結果を組み合わせ、「取り出し指導」を多面的、かつ立体的に描いている。4章でも事例調査のデータをもとに、縦断的な調査によって生徒の変容と支援の有効性を描き出しており、分析的に確実である。これによって、多面的で可変的な外国人生徒の学習支援の実態と学習ニーズにアプローチすることに成功している。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は3つの部分から構成されている。第1は、定時制高校の特徴と外国人生徒の関係を明らかにした部分である(2章)。第2は、「取り出し指導」に焦点を当て、制度導入後の内実と問題のメカニズムがいかに関生成するかを解明し、同僚性構築の阻害要因を「専門性」の観点から検討した部分である(3章)。この章は、本論文の核をなす部分であり、①「状況依存」「講師依存」の傾向、②生徒のニーズや視点が考慮されないこと、③担当の非常勤講師が仕事を「シャドウ・ワーク」として負わざるを得ない一方で、同僚性から疎外されていること、を明らかにしている。さらに、「講師依存」のメカニズムとして、学校、非常勤講師、生徒それぞれの要因が相互に作用して支援が効果的に働かないという実態を解明した。また、同僚性阻害の要因として、「取り出し指導」の「専門性」のとらえ方の影響と、個々の講師が実践的知識を共有しないという注目すべき結果を報告している。第3は、研究の過程で浮かび上がった、ニーズが自分で不明確な生徒に対しどのように学習支援を検討するのか、という課題に対して、事例調査から、生徒のニーズをとらえる視点を具体的に示し、実践化の可能性について提言している(4章)。

以上、各章の考察、さらに全体の考察は、データに即してなされた的確なものであり、導き出された結論も妥当なものである。また、本論文の中には「論文目録」にあるような査読付きの学術雑誌に掲載された論文や学会発表が含まれており、当該領域の学術的な水準に十分達している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

本論文はこれまで研究がなされていない高校の外国人生徒に対する学習支援に果敢に取り組み、長期間にわたる参与観察を通して、有効な学習支援のあり方を実証的に解明した研究である。先行研究では、外国人生徒のニーズ把握が重要であるという点が指摘されてきた。しかし、本研究では、生徒の学習支援のニーズは最初から明確で固定したものがあるとは限らず、そのニーズを教員と生徒が共に創り上げる必要性を明らかにした点は新たな知見であり、異文化間教育、特に外国人生徒の教育の研究として高い水準にあり、取得学位にふさわしい意義が認められる。また、こうした生徒の新たな学習支援のニーズに応じるには、「取り出し指導」の制度や「日本語指導」というとらえ方の変革が必要であり、そのための実践のあり方を提言している点は、今後のこの教育を構想する上で大きな示唆を与えるものであり、その教育的意義が高く評価できる。

以上を総合して、本論文は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士(教育学)の学位授与にふさわしい論文であると判定した。